



TOHOKU
UNIVERSITY

2011

読書の年輪

—研究と講義への案内—



発行日:2011年4月1日

発行者:東北大学 教養教育院

〒980-8576仙台市青葉区川内41 (川内キャンパス内)

Tel:022-795-7537 Fax:022-795-7540

<http://www.las.tohoku.ac.jp>

COPYRIGHT©TOHOKU UNIVERSITY ALL RIGHTS RESERVED.

本冊子の記載記事・写真などを了承なく転載することはできません。



東北大学 教養教育院
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

2011

読書の年輪

—研究と講義への案内—

東北大学 教養教育院



表紙の写真／東北大学史料館(片平キャンパス)。旧制東北帝国大学の中央図書館として、1924年(大正13年)に竣工。戦災を免れて1965年(昭和40年)まで本学の研究、教育を支えた。現在は、2階の旧学生閲覧室が本学の歴史資料の展示場となっている。

上の写真／東北大学百周年記念会館川内萩ホール(川内南キャンパス)。50周年で建造された記念講堂のデザインを可能な限り保存、修復し、第一級級のコンサート専用ホールと同等の非常に高度な環境のコンサートホールの要素を加味した国際会議場である。

読書の年輪

—研究と講義への案内—



刊行にあたって



東北大学では、「東北大学アクション・プラン(井上プラン 2007)」に基づき、大学教育の基幹となる教養教育の充実をひとつの重要な課題としています。そこで2008年4月には「教養教育院」を設置し、東北大学高等教育推進開発センター等と連携しつつ、本学の全学教育における教養教育の魅力的な実施と展開の一翼を担うものとなりました。

教養教育院では活動の一環として、総長特命教授に就任した名誉教授による、長年にわたる専門教育と研究の経験を生かした教養教育関係の授業が行われています。この小冊子『読書の年輪——研究と講義への案内』は、総長特命教授が各自の講義やゼミをめぐり、またその背景にある研究生活の一端をも紹介するために昨年発刊されました。本年度は、2010年度に在職した6名の総長特命教授が、それぞれ6冊の本を選んで紹介しています。この冊子が、新入生諸君にとって、授業への案内として役立つことを期待しています。

2011年4月

東北大学教養教育院長
根元 義章

乱読の履歴

—そしてこれからの推薦本—



工藤 昭彦 Kudo Akihiko

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院農学研究科)、農学博士
専門分野:農業経済学

[担当科目]

基礎ゼミ:「農」的世界の可能性—ポスト工業化社会の展望/現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造

基幹科目:資本主義と農業

総合科目:時代の文脈からみた「食」と「農」/環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ

研究室:国際文化研究科棟502号室
E-mail: akihiko@bios.tohoku.ac.jp

読書は嫌いな方ではなかった。かと云って、年輪を語るほどの記憶はない。系統立てて読むというよりは、乱読であった。中学時代は何と言ってもヘルマン・ヘッセ。確か夏衣裳の少女のことを謳った詩の一節を、奥座敷の縁側で誦じたものだ。けたたましいセミの鳴き声を聞くと、今でもかげろうのような光景が時折甦る。青春であった。

往復4時間以上の高校通いが始まると、冬など真っ暗なうちに家を出た。ある日、担任の先生から「図書館の貸出は君が一番多いね」と云われたことがある。相変わらず乱読が続いていた。後で分かったが、先生は密かに小説を書いていたようだ。

この頃は対人恐怖症に悩んでいたこともあり、読書の記憶も楽しい思い出もあまりない。強いて言えば、太宰の『斜陽』ぐらいか。元華族の落ちぶれていく様が、明治生まれの気丈夫な祖母から聞かされた我が家の歴史と重なって、妙に生々しかった。た

だ、太宰は最後まで好きになれなかった。

入学の儀式が終わり、米軍が置き去りにした蒲鉾校舎が残る川内で始まった教育部暮しは、気怠かった。4年間続ける羽目になった乗馬部も、ある先輩の強引な客引きに逆らう勇気が無かっただけで、自ら入部を決断した訳ではない。不思議なことに自分から止めようとは思わなかった。

馬が取り結ぶ人間集団の生態は、書物の世界とは違うリアリティがあった。同じ釜の飯を喰ううちに、いつの間にか対人恐怖症からも解放されていた。『風とともに去りぬ』など超娯楽本は別として、それまでの乱読は、しばし眠りについた。

目覚まし時計のベルを激しくかき鳴らしたのは、全国に吹き荒れる学園紛争の嵐である。皆が脅迫観念に取り憑かれたように活字を貪り、激論を戦わした。マルクスの資本論、ヘーゲルの大論理学、精神現象学などが突如として必読本になったのだからたまらない。読まない会話についていけない気がした。考えてみれば、意味不明の乱読であった。

ただ、もう一度じっくり読んでみたいのは、マルタン・デュ・ガールの『チボ一家の人々』。白水社から山内義雄訳の5巻本が出ていて、これだけはまだ手元に残っている。第一次世界大戦前後の戦争と革命の嵐が吹き荒れるヨーロッパを舞台に、フランス生まれの主人公ジャックと彼を取り巻く人々の生き様を描いた壮大な歴史ドラマだ。

次ページからは、私の講義や基礎ゼミに関連して、これを読んでもらおうと嬉しいと思う本を6冊ほど紹介した。中には絶版本もあるが、図書館には数冊あるし、ネットで古本もまだ手に入る。参考にして欲しい。



和辻 哲郎著

風土—人間学的考察—

1935年、岩波文庫、1991年

本書が刊行されたのは、戦前の1935年。間もなく80年近くにならんとするのに、新たな読者を獲得しながら読み継がれている。環境の世紀を迎え、改めて人間と自然の折り合いのつけ方が問われているからだろう。1991年に若干体裁を整えて再発行さ



大内 力著

農業の基本価値

創森社、1990年10月

農業問題は、かつて農民や農村の絶望的な貧困問題であった。大内氏は処女作『日本資本主義の農業問題』(日本評論社、1948年、毎日出版文化賞受賞)以来、90才で逝去されるまで、積み上げれば身の丈の2倍にも及ぶほどの著書を世に出したという。

れた本書は、2009年に5刷りが出るほど静かなブームを呼んでいる。

たやすく読める本ではない。ハイデッカーの『有と時間』を批判的に継承し、人間存在の構造を時間と空間が織りなす風土としてとらえる哲学の書でもあるからだ。

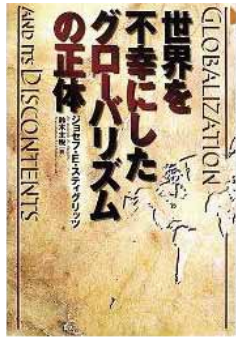
特殊な風土は人間存在の特殊な構造でもある。こうした視点から著者は、モンsoonアジアは「受容的・忍従的」、砂漠地域は「実際の・意志的」、牧場的ヨーロッパは「理性的・合理的」といった人間類型の特質を鮮やかに浮き彫りにしてみせた。しばしば誤解されるように、風土が人間類型を規定しているという意味ではない。人間類型もまた風土なのだ。

従って、風土にしる人間類型にしる、共に変わり得ると考えていざらう。グローバル化の嵐が吹き荒れる中、風土を支えてきた屋台骨も激しくぐらついているからだ。どんな風土創りを目指すのか。まずは本書を手にして格闘してみたい。

緻密な論理が持ち味の氏の業績の中で、異色を放っているのが本書である。「食糧の安定的供給」、「自然環境の保全」など農業が有する四つの基本的価値について力説し、農業壊滅路線の選択は日本を「無農国」にするばかりか、「無能国」にすると警告している。農業の環境保全機能を重視することは、地球環境保全との関連でも注視されるべきだともいっている。

グローバル化の嵐に身を委ね、ただ単に自由貿易とりわけ農産物など一次産品の貿易を拡大していくことは、輸出国にとっても輸入国にとっても破壊的意味を持つという指摘など、自由貿易の一方向的な拡大を目指すTPP(環太平洋経済協定)への参加がマスコミを賑わしている時だけに、改めて注目されてよい。

第一級の経済学者が珍しく情念を交えながら発した警告は、出版から20年以上経ったいまもなお、鮮度が失われていない。



ジョセフ・E.スティグリッツ著
世界を不幸にしたグローバリズムの正体
楡井 浩一訳、徳間書店、2002年5月

反グローバリズムの本だと思われがちだが、そうではない。原題は、「Globalization and Its Discontents」。グローバリゼーションそのものというよりは、それを推進してきたIMF、世界銀行、WTOなど国際機関側に問題があるというのが著者の立場だ。規制緩

和、自由貿易こそ全ての人々の利益になるという信仰にも似た硬直的な思考パターンが、アジア通貨危機への対応のまずさなど、多くの災いを招いてきたからだという。

ビル・クリントン大統領の経済諮問委員会委員長、世界銀行のチーフエコノミストなどを歴任してきただけに、分析はリアルで分かり易い。著者が目指すのは「人間の顔をしたグローバリゼーション」へのチャレンジ。途上国の人びと、破壊が進む自然環境や農業など、疎外されがちな領域に対する眼差は優しい。

もともと著者は「情報の非対象性理論」で2001年にノーベル経済学賞を受賞した数理経済学者。そういう著者をして、数式を一切使わない本書を書かせしめたのは、独立したばかりのケニアでの大学教員経験や世界銀行時代のアジア通貨危機だろう。海図なき航海の時代、本書には羅針盤となるような指摘が随所に鑲められている。



西川潤著
飢えの構造
ダイヤモンド社、1984年12月

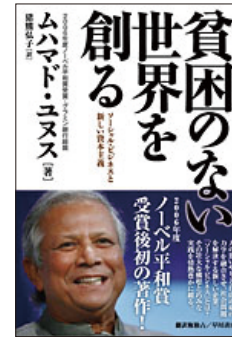
本書が出版された1970年代初頭、世界は食糧危機に見舞われた。危機は第三世界の途上国においてより深刻であった。その渦中であって、危機を招いた本質は途上国が置かれた植民地的社会経済構造に内在しているとして、問題の深層部に鋭

いメスを入れたのが本書である。この頃、分析視角を共有するフランクやアミンなどの従属理論が一世を風靡していた。以来本書は、1979年までに11版を重ねるほど幅広い読者を獲得し、84年には紹介した表紙の増補改訂版が出版された。

近代の意味を問い直し、南北問題の差別をもたらした資本主義の歴史過程を紐解きながら、「飢えの構造」を政治経済学視点から考察した本書の中身は、なお新鮮だ。

2008年、世界は再び食糧危機、石油危機に見舞われ、2011年も、新年から食糧価格が戦後最高を上回るなど、不穏な動きが続いている。

植民地の独立や社会主義圏の崩壊など、世界史の構図は本書出版当時に比べて様変わりした。かといって、資本主義のグローバル化が世界を幸せにした訳ではない。「飢えの構造」や「石油危機」も続いている。年数が経ったとはいえ、本書は必ずや考えるヒントを提供してくれるはずだ。



ムハマド・ユヌス著
貧困のない世界を創る
猪熊 弘子訳、早川書房、2008年10月

2000年の国連ミレニアム宣言は、15年後に貧困を半減させると宣言した。にも関わらず、成果はさほど上がっていない。一日わずか1ドル以下で暮らしている貧しい人々が、世界にはまだ14億人もいる。日本人の10倍以上と膨大だ。貧困は弱者である子

ども達を容赦なく襲い、1日3万人、5秒に1人の割合で幼子達の命を奪っている。サハラ以南のアフリカだけではない。貧国人口の半数近くを占める南アジア地域でも問題は深刻だ。

本書の著者ムハマド・ユヌス氏は、バンクラディッシュでグラミン銀行(村の銀行)を創設し、貧しい女性グループを対象としたマイクロクレジット(無担保少額融資)により貧国の軽減に大きな成果を上げた。同様の取り組みは多くの途上国にも広がり、同氏及び同銀行はその功績により2006年ノーベル平和賞を受賞した。

本書はグラミン銀行だけの紹介本ではない。新たなソーシャル・ビジネスへの挑戦を呼びかけ、貧困の撲滅を世界に訴えている。損失も配当もない、人類の重大な関心事に立ち向かうビジネスへの挑戦だ。強烈な著者の信念と着実な実行力に、共感を覚える読者も多いのではないか。最近では日本でも、ユニクロとのビジネス提携が話題を呼んだ。



加藤 尚武著
新・環境倫理学のすすめ
丸善(株)、2005年8月

人間の行動規範を論じる学問という意味で、環境倫理学も古来からの倫理学の範疇に入る。それが独自の学問領域として広く市民権を得るようになったのは、環境問題が深刻化したからだろう。1972年の「国連人間環境会議」(ストックホルム会議)前後

から、欧米で環境倫理学という言葉が使われるようになった。92年の「環境と開発に関する国連環境会議」(リオ・サミット)以降、環境倫理学は扱う対象や内容を拡大しながら世界に広まった。

いまや「エコしよう」、「エコしている」といった軽いノリで語られるほど、環境倫理学は身近なものもなった。功績の一端を担ったのは、加藤氏が20年前に出版した『環境倫理学のすすめ』だろう。その続編にあたるのが本書だ。

前書は京都議定書のような国際協力体制が生まれることを期待しながら書いたという。今度の本書には、同議定書が誕生と同時に傷だらけになる中、学生諸君のような若い世代への著者の願いや期待が込められている。終章で、「戦争による環境破壊」を警告しているのも、本書ならではの。

「世界の有限性」、「世代間倫理」、「生物種の生存権」など環境倫理学の三原則は、20年前から少しもぶれていない。

学問とは何か？ —大学は何を目指すべきか—



森田 康夫 Morita Yasuo

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院理学研究科)、理学博士
専門分野: 数学(整数論)、数学教育(少子化が教育に与える影響の研究)、入学試験

[担当科目]

基礎ゼミ: 「学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える」

基幹科目: 「科学と情報: 数学と人間—数学を俯瞰する」

総合科目: 「教育と科学技術」/ 「大学の社会的機能—現代の大学は何を目指すのか」

研究室: 国際文化研究科西棟510号室
E-mail: ysmorita@m.tohoku.ac.jp

私は第二次世界大戦が終わった1945年に生まれ、高度成長期の1970年に数学の研究者として出発し、整数論の色々な分野で研究をしてきた。しかし東北大学の教授として入学試験と交通問題を担当することになり、数学教育や入学試験のことも研究するようになった。このため、それまでは新しい数学の定理を探すことに私は熱中していたが、現実世界の中で入学試験や教育をどのようにして改善するかを考える様になり、真理を知りたいという「思い」重視から、どの様な結果となったかという「結果」重視に価値観を変えた。

私は教育の任務は若者の能力を開花させ、有能な人材として社会に送り出すことにあると考えている。教育は人材育成を行うサービス産業であり、お客様である生徒や学生の幸せと、社会発展の基盤となる有能な人材を育成するため、できる限りの努力をすべきものと私は考えている。しかし、日本

社会では少子化の中で大学の学生定員が増加しており、今まで若者を学習させる主たる動機であった入学試験に受かることが容易になり、誰でもどこかの大学に入学できるという「大学全入」が実現している。そのため、ゆとり教育の影響もあり、今までより少ない知識と能力を持った若者が大学に入学している。私は数学という結果が見やすい教科を担当していたため、日本がこの様な状態になることを15年余りに気づき、友人達と共に入学試験や数学教育の改善のために努力を続けてきた。

私達や私達の直ぐ下の団塊の世代は戦後の貧しさを憶えており、生きるために必死になり働いてきた。その結果、1980年頃には日本は欧米に追いつき、「Japan as No.1」とまで言われる様になった。しかし日本人は慢心し、バブルを起し、さらにその処理にも失敗し、現在に至っている。

私は、今日本は分かれ道に面していると思っている。そのため、「日本人はこれからの世界でどのようなことを目指すべきか？」を考えることが必要であると考えており、大学人は、「学問とは何か?」、「日本の大学は何を目指すべきか?」について再考すべきだと思っている。

私は入学試験、数学史、および科学技術をテーマとした授業を行っており、授業を行いながら以上の様なことを考えている。以下でお薦めする本は、この様な視点から選ばれたものである。

スティーヴン・オープンハイマー 著
人類の足跡10万年全史

仲村 明子訳、草思社、2007年発行

人類は約700万年前にアフリカで類人猿から誕生し、その後ユーラシア大陸に広がった。私達ホモ・サピエンスがどのようにして古いタイプの人類(旧人)から進化したかについては、アフリカで進化して全世界に広がったという説と、世界各地で進化したと

いう二つの説があり、長年議論になってきた。しかし、最近ミトコンドリアの持つDNAなどを使って過去を解析する方法が発達し、ホモ・サピエンスはアフリカで進化したとの説が有力となっている。

この本では、現代人が持つミトコンドリアやY染色体のDNAに基づき人類史を詳しく分析し、ホモ・サピエンスは旧人から十数万年前にアフリカで進化し、氷河期による海水の低下に助けられ、約10万年前に(スエズ地峡ではなく)紅海の南端からアラビア半島へ渡り、さらに海沿いにアジア大陸に渡り、約8万年位前に東南アジアを介して東アジアとオーストラリアへ、約5万年位前に中東を介してヨーロッパに、さらにベーリング海峡を経て約2万年前にアメリカ大陸に広がったと主張している。

最近の生命科学の発展や人類の起源などに興味を持つ人に勧めたい本である。

柳田 邦男著
ガン回廊の朝(あした)(上・下)

講談社文庫、1981年発行

柳田邦男氏はノン・フィクション作家であり、医療や航空などを専門分野としている。本書は、昭和37年に設置された国立がんセンターの開設当初のガン克服を目指した戦いを描いた名著である。

ガン医療は急速に進展しており、最近では完治する

人が増えている。しかし、当時は5年生存率も低く、初代のがんセンター総長がガンにかかったときには、本人にガンであることを告知しなかった。このように、この本で書かれていることと現在のガン治療とはかなり異なっている。しかし新しい知見を得て科学を進歩させる努力はいつの時代でも同じであり、この本には高度成長期に日本人がガン撲滅という夢に向かって戦いを始めた時代の熱気が描かれている。

この本は読み物としても面白いが、柳田氏は徹底した取材に基づき客観的に書いており、この本を読むことにより、研究成果を出すとはどういうことか、現実を改善するとはどういうことかを知ることができる。私達が「少子高齢化と財政危機に直面した日本を、これからどう立て直して行くか」を考える際の参考としても、この本は役立つものと思われる。



E.T.ベル著
数学をつくった人びと I、II、III

田中 勇／銀林 造訳、ハヤカワ文庫、2003年発行

数学は古代文明と共に誕生し、古代ギリシャにおいて数学の学問としての体系ができた。その後、ギリシャの数学はインド・アラビアを介してルネッサンス期のヨーロッパに伝わり、デカルトやニュートンの研究により、「科学を語る言葉」としての数学の

地位が確定した。この本では、この様な歴史を数学者の逸話を紹介しながら記述している。

この本は1937年に初版が出た数学史の古典であり、日本語訳は1997年に出版され、2003年に文庫版が出版された。この本が書かれた当時には20世紀の数学の評価が確定していなかったため、20世紀の数学については余り書かれていない。

この本のIでは古代から18世紀までの数学を紹介し、IIでは19世紀前半の数学を紹介し、IIIでは19世紀前半から20世紀初めまでの数学を紹介している。

この本について、森毅氏は「微分積分学が何をしたくて考え出されたかわかったら、微積分発明の裏にニュートンとライブニッツのどろどろした先取権争いがあったと言ったら、俄然興味がわいてきませんか?」と言っている。

科学や伝記に興味を持つ人に勧めたい本である。



佐武 一郎著
線形代数

共立出版、1997年発行

線形代数は、微分積分学と並び大学の初年度に学ぶ数学で、色々な専門科目の基礎となっている。

佐武一郎氏の線形代数学の本としては、『線形代数学』(裳華房)が名著として有名であるが、この本は数学科向けではなく、一般の理系の学部向けの

教科書として書き直されたものである。扱う対象を有限次元のベクトル空間に限り説明などを推敲したため、本の厚さが薄くなり、かなり読みやすくなっている。

この本は、サイズが2の行列から始め、一般の行列とベクトルの性質、ベクトル空間と線形写像の紹介の後に行列式を定義し、連立方程式の解法、計量(内積)を経て、行列の標準化で終わっている。

この本の特徴としては、行列式を、置換群を使った定義ではなく、行列式が持つべき性質を使って定義しているので、「行列式は何か」と言うことが今までより分かりやすくなっている。また、幾何的に面白い具体例も多く、自分の理解を具体例で確認しながら読むことができる。

佐武氏は保型関数の世界的権威であり、行列と関係の深い代数群についても色々な業績を上げていたが、本書を読むことにより線形代数に基礎を持つ数学の広さを垣間見ることができる。



マーカス・デュ・ソートイ著
素数の音楽

富永 星訳、新潮社、2005年発行

オイラー (1707年-1783年)は $\zeta(s)=1+2^{-s}+3^{-s}+4^{-s}+5^{-s}+\dots+n^{-s}+\dots$ で定義される関数 (ζ 関数と呼ぶ) を考え、「自然数は素数の積として表せる」という定理が、 $\zeta(s)=\prod_p(1-p^{-s})^{-1}$ (p は素数全体を動く)

という等式で表現できることを発見した。その約1世紀後にリーマンは $\zeta(s)$ を複素変数の関数として研究したが、その時発見された「 $\zeta(s)=0$ となる複素数 s は、負の整数でなければ、実部が $1/2$ である」というリーマンの予想が本書のテーマである。

この本は、オックスフォード大学の数学の教授で、科学関係の記事を多数書いているソートイ氏が、リーマン予想を中心とする素数研究の現状について書いたものである。数式をほとんど使わないで書きながら、整数論が専門の私の目から見ても、非常に正確に数学的内容を伝えている。

この本は、オイラー、リーマン、ゲーデルなどの数学者の人間的な魅力を、素数というテーマに沿いながら紹介している。これから数学を専門として学習しようとする人、趣味として数学に興味を持っている人、数学とはどのような学問であるかを知りたい人などにお勧めしたい本である。



高木 貞治著
初等整数論講義

共立出版、1984年発行

高木貞治氏 (1875-1960) は日本人で初めて世界レベルの数学研究を行った学者である。高木氏はドイツのゲッチンゲン大学に留学し、「20世紀に解かれるべき23の数学の問題」についての講演で知られる大数学者ヒルベルトの下で、整数論の研究

を始めた。高木氏は日本に帰国後、第1次世界大戦でヨーロッパから日本に数学の専門誌の届かなくなったのを契機に、代数的整数論の研究に没頭し、整数論における金字塔である類体論を作り、その後の日本と世界の数学界に大きな影響を与えた。

高木氏は数学の普及にも熱心であり、解析概論など多くの名著を残したが、この本は、高木氏の専門である整数論への入門書として書かれたものである。私は大学に入学後、大学周辺の古本屋でこの本を見つけ、一生懸命読んだことを覚えている。

この本は、整数の整除や合同式から始め、連分数や数の幾何学の後、2元2次形式と2次体についての理論の紹介を行っている。さらに付録では、ゼータ関数を使った解析学手法も紹介されており、類数や単数という代数的な対象がゼータ関数を介して解析的に表現されることに私は感激した。

数学に興味を持つ人に薦めたい名著である。

本との出会い — 今、君たちだったら —



海老澤 丕道 EBISAWA Hiromichi

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院情報科学研究科)、理学博士
専門分野: 理論物理学(超伝導/超流動、ナノ物理学)、ゆらぎ科学

[担当科目]

基礎ゼミ: 「ゆらぎを科学する」/「現代物理学探訪—ノベル物理学賞に学ぶ」

基幹科目: 「自然界の構造: おはなし物理学」

総合科目: 「科学と人間」

研究室: 国際文化研究科西棟411号室
Email: ebi@m.tohoku.ac.jp

高校生時代までに学校で得る知識はたいがい、皆一緒に同じことを同じところまで教わって得るものだ。入学試験問題をなるべく正しく解くために役立つ学力が身につくであろうが、それは結果を教わることが主であり、学問とは言えない。皆が同じことを教わるからではなく、結果を教わるからだ。大学での学びは記憶に取り込んだ広い知識ばかりではなく、身についた力が目標でなくてはならない。それも、既存の問題が解ける力ではない。私はそんなことを考えて、担当する授業科目の内容をより良くする努力を続けてきた。

およそ半世紀前、諸君と同じように大学生としての一步を踏み出した。1年半ほど考えた末、私は物理学者になる道をたどり始めた。その頃は物理学科自体が小さな学科で家族的であり、好きな分野と限らずに皆で専門書を一緒に勉強し、専門外の本を輪読する学部学生生活だった。その時代、つま

り進路を決めるまでと研究生活が本格化するまでの過程で、それまで子供時代から読んできた本とは別の種類の本に知識を求めた。高校生時代までは文学書が主だったし、子供の時は子供向けの科学書も多く読んでいたのだった。

私の「読書の年輪」はその学生時代のところの刻みが厚い。論文を読むことに追われる前のことである。読んだ本はその後の研究に役立ったというよりも研究をする私の心を作った本といえる。そう長い時間を読書に使う余裕もなかったので、多くは新書や文庫本であった。分厚いような本は題目に惹かれて買っても読み通せなかったように思う。

3年前に教養教育科目を担当することになって授業内容を創ることになり、あの頃に読んだ本が半世紀の時空を超えて頭の中によみがえってきた。それらの本に気持ちを高められて、研究がどんな意味を持つかを課題にした「科学と人間」の授業の企画ができた。小学生から中学生の頃に愛読した一冊の科学啓蒙書に影響されて、数式になるべく頼らないで物理学を知り、身近な現象について考える力を養おうとする「自然界の構造: おはなし物理学」の授業内容が構想できた。

それらの科目の詳しい説明は省き、それらを企画・構想する基となった本を紹介しよう。私が出会った本の一部である。物理学に偏っているが、物理学が学問の樹における幹の位置にあるのだから、として許していただきたい。手にとってもらうと良いが、少なくとも参考になることをのぞんでいる。君たちがそれぞれ読みたい本、君たちを育ててくれる本と出会うことが願である。



アインシュタイン/インフェルト著
物理学はいかに創られたか(上・下)

石原 純訳、岩波新書、上1939年、下1940年

二十世紀に活躍した世界最有名人で相対性理論を確立した人として知られるアインシュタインは理論物理学者の象徴ともいえる存在だ。自然現象を相手に人間の心が「物語」をどのように作り上げようとしてきたか、evolution(発展、進化)として



ポアンカレ著

科学と仮説 河野 伊三郎訳、岩波文庫、品切重
版未定(和訳初版1938年・原書1902年)

クラスメート達のおかげでこの本に出会った。量子論・電磁気学など専門基礎科目を学ぶのに忙しかった頃、泊まりがけの読書会の提案があり、かなりの人が参加した。伊豆にあった大学の施設だったが、楽しい集まりだった。読んだ本がこれである。

語っている。数式を使わないで「たとえ」と要所に図・写真を使った丁寧かつ明快な記述である。

まず、ニュートンの力学とファラデーとマクスウェルによる電磁気学の歴史を「力学的世界観の『勃興』と『凋落』」として語り、物理学の内容も説明し、実は自然科学とは人間のいかなる活動であるかを教えてくれている。次いで相対性理論・量子論を詳しく説いている。アインシュタインは最後までボーアらの「確率解釈」を認めなかった人だが、インフェルトがしっかり書いてくれた。

言葉遣いは訳者の石原純(元東北大学教授)がアラギ派歌人でもありきれいな日本語であるが、初版以来70年そのまま発行され続けて今ではいくらか古めかしいし、視覚的にはほとんど文字ばかりではある。それだけに、内容がぎっしり詰まっている。文系系系を問わずに思考力と知的好奇心を備えた学生なら読み進められる名著である。

著者は数学者だが理論物理学者・天文学者としても功績を残している。論文だけでなく著書の数も膨大である。科学思想については、この本が彼の書いた最初のものであり、最も有名である。

私達が直接に興味を持ったのは第九章「物理学における仮説」であったのだと思う。物理学は実験によって真実を知る学問である。だが、それなら数理物理学の役割は何なのか。ここで、事実の集積が科学ではない、それは石を積み上げて家にはならないのと同じだ、という。良い実験は一般化を許す。これにより充実してゆく科学を蔵書が絶えず増大する図書館にたとえて、目録を調整する役割を果たすのが数理物理学だという。一般化はそれぞれが仮説であり、物理学ではそれは多く数学的形式をとる。こう始めて、科学がどう発展してきたか、どうあるべきかを豊富な例をあげて教えてくれる。科学を学ぶ人にも哲学を学ぶ人にも優れた古典である。



寺田 寅彦著／池内 了編
懐手して宇宙見物
みすず書房《大人の本棚》、2006年

寺田寅彦という物理学者は夏目漱石の『三四郎』に登場する野々宮さんのモデルとして、また「天災は忘れた頃に来る」という防災の警句で知られ、随筆家で俳人でもある。

寺田の研究には、まだX線が粒子線か電磁波か

が不明だったとき、鉱石の結晶による波としての回折の実験を行ったものがある。実験を成功させNature誌に発表した。しかし、ブラッグ父子がほんの少し先じて研究していたことを知って寺田はこの研究を止め、全く別の方向に研究を変えた。「人まね嫌い」だったそうである。ブラッグ父子はノーベル賞を受賞し、寺田は学士院恩賜賞を受けた。

随筆集『備忘録』中の「線香花火」には花火の説明に加えて、日本固有の線香花火が次々に枝分かれする現象を日本人の手で解明したい、西洋の学者の堀り散らかした後へ鉱石のかけらを探しに行くもよいが足下に埋もれている宝をも忘れてはならない、と書いている。

最近になってこの本があることを知った。科学を対象にしたものに限らず、文学味豊かな多くの随筆を収録したものだ。すべての分野の学生諸君に勧めたい。身近なことを観察しながら本質を洞察する寺田寅彦の精神を学び、楽しんでほしい。



ジェームズ・D・ワトソン著
二重らせん
江上 不二夫／中村 桂子訳、講談社文庫、1986年

科学研究の現場の話は一般の人たちには小難しくなってしまう、面白くもないだろう。これは私が研究を始めた頃に抱いていたイメージであった。ところが、この本を読むと、研究がどんなに人間的であり、社会的であり、すごいドラマの展開であるか

を如実に感じることができる。

遺伝子の所在は細胞の核にある核酸、DNAの上であろうと分かり始めた時代に、DNAの物理的な構造模型を提唱したのが著者ワトソンとその共同研究者フランシス・クリックであった。その基となったX線回折の研究を行ったモーリス・ウィルキンスとともに1962年のノーベル生理医学賞を受けている。研究は1951年から1953年にかけて展開されたが、その経過の実に人間臭い記録が本書である。

私は博士課程の学生だった時に、原著が書かれた(1968年)同年にタイムライフインターナショナル社から出版された同じ翻訳者達による「DNAの構造を発見した科学者の記録」と副題がついたものを読んだ。感動したと言うより、人間が研究をすることの意味を妙に納得してしまったように思う。一方で、ワトソンの強烈な個性に対して違和感を覚えた気もする。



中谷宇吉郎著
科学の方法
岩波新書G50、1958年(第52刷2009年)

著者は寺田寅彦の弟子であり、雪の結晶の研究で知られる低温物理学者である。北海道大学在職中に亡くなる少し前に書かれたこの本だが、それから年月が過ぎた。しかしこの本に言う「科学の進歩はめざましく、科学がもう頂点に達したと思いが

ち」なのはその頃も今も同じであろう。

自然科学の本質は何か、どういう方法を用いて進歩してきたか丁寧に語っている。よく、ファラデーなどの時代ならちょっとした実験をしても大きい発見があったが現在は多額の研究費を使い大がかりな機械と装置を持たないと研究らしい研究はできない、と言われるが中谷は、科学は菌糸のように隙間だらけに発展しているので抜けたところがたくさんあると書いている。

科学における人間的要素にも触れている。法則は自然界に存在するのではなく人間が法則を仮定して実験精度の範囲内で実証したものだを教えてくれる。「金属から出る放射線」研究や「ミトゲン線」なる生体からの放射線の初期の研究の嵐も人間的要素が強く働いたという。

形の研究をした中谷が茶碗の曲線や木の枝振りに感じる心を科学と離れたところに置いたのは印象的だ。



佐野 昌一著
おはなし電気学
科学知識普及會(明治書院発売)、1939年(絶版)

こんな感じの本を今、知識欲盛んな子供達が食い入るように読み進むところを想像してみると本当に楽しい。電子の話から始まってざっと挙げると、静電気、電流、電磁気の話、発電の話、家庭内の電気の話、電車の話、電気機関車の話、電話の話、電

話交換機の話、放送の話、真空管の話、電波の話、落雷の話、映画の話、テレビジョンの話まで47話の構成である。もちろん縦書き、右めくりの、小説スタイルである。それもそのはず、著者は海野十三(じゅうぞ)のペンネームでSF小説や探偵小説を書く通信省電気試験所研究員の技術者・作家だった。著者自身手書きの挿絵も豊富であり、楽しめる。

序文にテレビジョン開発で知られる川原田政太郎元早大教授が、「快著」であるとしてその平易さ、面白さ、かゆいところに手が届く様を賞賛している。アマチュアファンのみならず、学生、専門家もこれによって真の意味を初めて掴み得るところ多々とある。私は父の書架で見つけ、出版後10数年を経たこの本の虜になってしまい、小学生時代から電気が好きになった。今は内容的には古い部分がほとんどだが、この本を読み返すと科学技術の知識とはかくあるべきだということがよく分かる名著である。

「大学時代でなくても、できること」ではなく



柳父 圀近 Yagyu Kunichika

総長特命教授(2009年度～2010年度、2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院法学研究科)、博士(法学)。専門分野:西洋政治思想史、マックス・ウェーバー研究。

[担当科目]

基礎ゼミ:「文明論の概略を読む」/「福沢、岡倉、内村—西洋化と知識人」
基幹科目:「法・政治と社会:政治学入門」/「歴史と人間社会:職業観念から見る社会史」
総合科目:「西洋史と政治思想」

私は長らく西洋政治思想史を担当してきました。とくに近代西欧に生じた市民社会の特質と近代国家の関係を、またマックス・ウェーバーの学問と思想を研究テーマとしてきました。川北でもその関連のテーマで授業をします。それはそうと、皆さんはこれからの大学時代をどのように使おうと思っていますか?

大学で勉強するということは、「世界の多面性」を知り始めることではないかと私は思っています。皆さんも、世の中にはいろいろな考え方があって、いろいろな価値観を持った人たちがいるのだということに次第に目覚めるのではないかと考えています。大学で、異なる価値観からは、世界のあり方が、自分の見方とは違って見えて来るのに気がつくことは大切です。(世の中の多様な考え方に接するのは、社会人になってからではないか、と思うかもし

れません。しかし社会人になると、案外その組織や業界の一つの考え方が時代の空気などに染まってしまうものです。)

大学では、授業を通じて、それまでの自分の頭とは違った考え方や、物事の捉え方に会おうでしょう。いろいろな学説や本に出会います。また、生身のいろいろな先生たち、友人たちとディスカッションして、くり返し、「世界の見え方」の多面性に目覚めて行くことになるでしょう。しかも「いろいろな見方」を、「私利私欲」を離れて検討し、理性的・批判的に深く考察する訓練を体験するはず。そしてそれこそは、大学生活ならでは、一種の「純粋経験」ではないかと私は思っています。そしてその中で先生や友人たちとの交流を深めてゆくことができれば、それも生涯の「財産」になるだろうと思います。

4年間はアツという間です。しかし上手に使えば実りの多い時間です。ですから何であれ、「大学でなくても」できることや、「大学を出てからこそ」できることに、学生時代を使うのは賢明ではないと思います。「大学でなければ」できないのは、たぶんこの知性の「純粋経験」でしょう。

大学には、さまざまな立場の研究者がいることが必要であり、学生は、多様な立場の学問に接し得る必要があるということです。また是非いろいろな本や文献に接してほしいと思います。この後すこし本を紹介しておきますが、それはあくまで私の講義との関係で参考になるものを紹介するという限りのものです。



マックス・ウェーバー著

職業としての政治

脇 圭平訳、岩波文庫、1980年、原書1919年

古今の「政治の世界」に通じた著者の知識が惜しげもなく使われ、また「政治と人間」についての深い思索が語られている、まずは類例のない講演です。

もちろん時代の制約を受けています。しかしぜひ読んで、いろいろ考えてみてください。



大塚久雄著

社会科学における人間

岩波新書、1977年

この本はNHK大学講座の講義をもとに書かれています。学生時代に読んでから今日まで多くの示唆を与えられて来ました。

社会科学はまず近代の西洋で、近代西洋人とその社会を自明の前提として形成されました。しかし

第一次大戦直後の混乱したミュンヘンで学生団体の求めに応じた講演ですが、今日でも大きな影響を、政治に関心のある人々(政治家だけではなく)に及ぼし続けています。

ひとつの行為がもたらし得る「意図せざる結果」をも、できるだけ予測して(その予測のためにこそ、社会科学は存在する)、そうした「意図せざる結果への責任」をも引き受けるのが、政治における倫理的態度(=「責任倫理」)だ。それは「動機の純粋性」に生きる「心情倫理」(信念倫理)の態度とは違って、という議論を——他にもいろいろ「政治の世界」の特質を論じていますが——とくにじっくり読んでみてください。

変則的なアドヴァイスですが、この本に限っては、最後から読み始めて、前へ前へとさかのぼり、もう一度頭から読むのがよいかも入れません。

そのままでは近代西洋以外の時代や文化圏の諸社会について学問的に分析するには無理が生じます。例えば近代日本の人間と社会には、近代西洋の場合と重なる面もありますが、大きな違いもあります。西洋の場合と学問的に比較するにはどうすればよいでしょうか。もちろん共通する要素の分析は重要です。しかし、それぞれの社会の人々の社会的行為の「主観的動機の意味」をよく理解し、社会現象を、その動機を「原因」として生じるものとしても因果関係的に十分説明する必要があります。この場合、それぞれの社会の文化、特に宗教意識の影響は大きな意味を持ちえます。そうした宗教文化との関係で生じる「人間類型」ないし「エートス」に注目して社会科学の新たな方法を形成したのがマックス・ウェーバーでした。

大塚さんはウェーバーのこうした方法をマルクスの歴史理論との関係で考察しながら、独自の方法へと展開しています。



マックス・ウェーバー著
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」
大塚 久雄訳、岩波文庫、1989年、原書1920年

現代社会科学の古典のひとつ。単なる「営利欲」や「投機」、また政治的特権に「寄生」する営業ではなく、ひたすら「合理的な隣人愛」実践としての職業活動にいそむることへと、当時の人々を強く動機づけたのが、プロテスタンティズムの職業観念だったと

分析しています。「社会」とはある意味では「職業」のネットワークです。プロテスタンティズムの「職業観念」は、封建時代の職分のネットワークたる「身分制社会」を一変させ、「市場」に媒介された「市民社会」を形成する社会の動きを加速させた。こういう分析です。

しかし歴史はここにとどまらず、同じプロテスタンティズムの「職業観念」は、意図せざる結果として、とどまることを知らない近代資本主義の進展にスイッチを入れました。その進展の先に生じる「人間疎外」の問題も、本書は鋭く論じており、現代の社会科学に大きな影響を与えています。

ところで、西欧とは違う文化伝統のもとにあった日本や東アジアの「近代化」の場合、こうした問題にあたるものは一体どうなっていたのでしょうか？
こうした問題関心にもいざなう本です。



福田 歓一著
近代の政治思想—その現実的・理論的諸前提
岩波新書、1970年

「民主主義」とか「国民国家」と云った政治制度や政治理論の多くのものは、ヨーロッパの歴史の中で形成されて来たものです。

もちろん、現代の世界では、ヨーロッパ文化圏の重みは相対化されていますし、また時代的にも「近

代」と「現代」では大きな変化が生じています。しかしそれだからと云って、政治について考えてみようという場合は、また積極的に政治学を学びたいという人は、西洋近代の政治学、政治思想の歴史を学ばないですますわけにはゆきません。中世や古代のヨーロッパ政治思想についても学んでゆく必要があります。民主主義と云う言葉が、古代ギリシャに由来することは知っているのでしょうか。

この本は、戦後の政治学と西洋政治思想史研究の発展に大きな役割を果たし、07年に亡くなった著者の、岩波市民講座の講演がもとになっています。学生時代に読んで政治思想史の扉が開かれた感のあった本の一つです。

なお、少し難しいかもしれませんが、同じ著者の、昨年刊行された論文集『民主主義と国民国家』（岩波現代文庫）も読んでみるとよいでしょう。



丸山 真男著
忠誠と反逆—転形期日本の精神史的位相
ちくま学術文庫、1995年

著者は日本政治思想史の専門家です。戦国武士の心には「天道」への忠誠心と、「主君」への忠誠心との矛盾が宿っていたと分析しています。その矛盾の間に生きていたゆえに、武士は時には天道に反する主君をいさめ、その方法として「腹を

切る」場合もあったと言います。

今日でも、ひとは「普遍的な原理(道理)」と、「組織」の「特殊利害」との緊張関係の間に立たされることがあります。そのとき人は「自分はどうする？」という問いに目覚めます。その自問によって初めて、ひとは「個人」としての自分に目覚めるのです。ところが日本では明治後半以後の「発展」とともに、上述の意味での「個」の意識がむしろ失われてゆく傾向が見られると、著者は資料によって分析しています。

この傾向にそれぞれの思想で抵抗した人びとを論じた論文「福沢・岡倉・内村：西欧化と知識人」の鮮明な印象は忘れられません。また幕末と明治初期にはあったいろいろな政治的、思想的可能性を論じた論文「開国」も示唆に富みます。



萩原 延壽著
書書周游
萩原 延壽集 5、朝日新聞社、2008年

萩原さんは本来歴史家ですが、政治、芸術、思想などさまざまな分野の本の書評を集めたものです。最初は、1972年に文芸春秋社から出た名著です。

ひとくちに「書評」と云いますが、他人の書いた本を公平に、また深く理解して紹介し、そのうえで、

しっかりした批評を書くのはなかなか難しいものです。今日でも世間には「その本がちっとも読んでいない書評」や、「内輪ほめ」の類が少なくありません。しかしこの本は、しなやかな自己意識と、「他者のものの見方」を積極的に理解しようとする精神による、本当の「対話」が伝わって来ます。これを読んで著者のその精神に「感染」することを薦めます。

この本で取り上げられているのは、20世紀の哲学者バーリンの名著『自由論』から、ナチズムとの困難な闘争を闘った名指揮者フルトヴェングラーの『書簡集』に至るまで、多岐にわたっています。ですからこの本は、社会と文化と歴史についてのすぐれた入門書でもあります。続編と云うべき『自由の精神』の巻も是非読むことを薦めておきます。

学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌まじりの本… 出会った本



秋葉 征夫 Akiba Yukio

総長特命教授(2008年度～2010年度)。
2011年3月末退職)、東北大学名誉教授
(大学院農学研究科)、農学博士
専門分野:動物栄養生化学、家禽学

[担当科目]

基礎ゼミ:「食の比較生化学—ヒトと動物—」/
「ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝」

基幹科目:「生命と自然:鳥とニワトリの生物科学」

総合科目:「食から探る生物・生命・暮らしの科学」

私が本を読み始めたと言える(意識している)のは高校時代だと思う。それは他の人たちに比べて断然遅く、自慢にはならない。高校時代は歴史小説を若干読んだ。吉川英治の文芸書『私本太平記』だったと思う。足利尊氏の波乱に満ちた生涯を描写したもので、この本を手にして以来、本を読むことの抵抗感が薄れたように記憶している。その後、東北大学に入り、クラブ(軟式テニス同好会)に入っ、先輩からいろいろの書物を紹介され、そしてこれらの本の感想についての議論や好きな作品の文章の書き写しなどを経験し、やっと半人前の「本読む学生」になったと思っている。学生時代は背伸びしながらも、詩集や哲学系の本にも手を伸ばし、結果的に人文系の知識も少しは得ることができた。

研究生生活(本学農学部)に入ってから、農学や栄養学の専門書や専門関連の書籍を読むことで手一杯になってしまった時期が多い。さらに昨今は、

時折に読む一般書は心休まる小説や随筆が多くなってしまった。そんなわけで、大学の教師としての読書量はきわめて少ないものと自覚(反省)せざるを得ない。それでも、好きな本や、勉強させられた本、印象深かった本は頭に浮かぶ。

教養教育院の教員として全学教育の一部を担当してから2年が経過する。担当講義は、私自身の40年間の研究領域であった食・栄養・生化学・動物・ニワトリを中心に組み立てた。講義の狙いは、私たちにとって身近でしかも大切な「食と栄養」そして「鳥類やペットなどの身の回りにいる動物」をよく観察し、ヒトと生物たちの「生命の営みとその不思議さ」を考えることを通して、身近な事象と視点から「科学する」することの楽しさを身に付けてもらうこと、と私は考えている。

ここに紹介する書籍は、私が読んで自身の生活に役立つ本、楽しかった(良かったと感じた)本である。いくつかは私の専門分野と講義内容に少し関連し、いくつかは関係なく感銘した本、そして気持ちが落ち着く本、楽しかった本、である。

何といっても、本を好きになること、そのために好きな本を見つけること、好きな本に出会うための少しの努力をすること、が大事のように思う。学生時代は、ジャンルにこだわらず何でも読める、何でもチャレンジできる、しかし過剰に気負うことなしに過ごせる、長くはない貴重な期間と捉えたい。



山下 是雄著

理科系の作文技術

中公新書、1981年

小中学校時代に課せられた「作文」そして「読書感想文」がきらいだった。人を感動させるような「感想」はとても書けなかった。このように「作文」「文章づくり」「レポートづくり」は苦手のままに過ぎてきたが、大学院学生時代に私の恩師である松本達

郎教授にこの本を紹介され、そして読破してからは、文章に対する苦手意識がほぼなくなった。そしていろいろな報告の文章や本でも、この「理科系の作文技術」を頭に思い出しながら味わうことができるようになった。

レポートなどを書くためには、主題を決定してその材料を集め、パラグラフを構成して文を組み立てる。その中で、事実と意見を明確に区別する、読む対象者を意識して結論を早めに提示する、わかりやすく短い文章にする、漢字を使いすぎない(文を黒くしすぎない)、同じ語尾の繰り返しは使わない、など、多くの注意点が示され、今でも私の中に生きている。小学校・中学校教育の中では「主観的記述」を植えつけられてきた面が強いが、大学および社会では調査報告、出張報告、技術報告、開発計画の申請書など「客観的記述」を求められる場面が多いのではないかな。

私自身、これまで大変参考になった「指南書」である。



本川 達雄著

ゾウの時間 ネズミの時間—サイズの生物学

中公新書、1992年

私は40年以上にわたって「動物栄養生化学」を勉強し、研究し、それらを学生たちに指導してきた。栄養学、栄養生化学は動物の体と生命の科学であり、その形態と機能に密接に関連するものである。私の恩師の一人である堀口雅昭教授からは動物栄養学を

全動物の体のサイズから認識することの大事さを指導していただき、エネルギーの流れやエントロピーの教えもいただいた。本書は、動物のサイズから動物の行動、動物のデザイン、動物の機能を解釈しようとしたものであり、ネズミからゾウにいたるまで全動物に通じる理論を導き出そうとする書である。

動物のサイズによってその動物が感じる時間が異なること、動物の行動圏と食量、動物の運搬コスト、動物サイズと呼吸数や心拍数の関係などが論理的に展開されている。また一生の間の心拍数や呼吸数は動物のサイズに関係なくほぼ同じであり、動物のエネルギー消費量は体重の3/4乗に比例することなど、生物と生命を理解する意味では心に残りやすい記述が多い。

本書全体がわかりやすい文章で構成されており生物学を学んでこなかった学生にも手に取りやすい新書(230頁)であり、動物世界を理解し、生命を思い、そして私たちが自身を考える観点を提供してくれる本の一つといえる。



安田 喜憲著
森と文明の物語 —環境考古学は語る
 ちくま新書、1995年

私の専門は農学であり、「農」は人類が長年にわたって築き上げてきた壮大な知恵であり、文化を作り出す源である、と学生に教えてきた。5000年も前に誕生した都市文明はいまや地球環境を破壊しかなない文化へと展開してしまったのを、私たちは

目にしている。
 本書(著者は東北大学の卒業生)では、文明の発祥の地であるメソポタミアやその周辺領域では豊かな森が存在したが、その名残りは地中海沿岸に少しだけ残っている巨大なレバノン杉に見られるのみで、現在ではこの地域にいわずの森は無い、と述べられている。もともと文明と森は共存していたのだが、文明の深化とともに破壊された森林、森林争奪戦争だったというトロイ戦争、地中海沿岸での森林伐採後の代替として植栽されたオリーブの木、消えたモアイの森の話など、化石や花粉の分析と放射性炭素などの技術を用いた環境考古学を駆使しての森林の盛衰を語る本書は、「文明・環境・農」を考える意味でも多くの視点を与えてくれる。そして、私たちの身近にある里山の森の歴史と機能から、「共生の森」の保存を論じていることに心を傾けたい。
 関連する書籍として、『森林の思考・砂漠の思考』、鈴木秀夫著、NHKブックス(1994年)も面白い。



ピーター・メンツェル/フェイス・ダルジェオ著
地球の食卓—世界24か国の家族のごはん
 みつち まちこ訳、TOTO出版、2006年

食べ物を見るのはとても楽しい。どんな人たちがどんな食事をしているのかを知るのも楽しい。食は等しく人間の生活の基本であり、外国に旅行した時、私はいつも食の市場を訪れる。市場の多様な食材、そしてその国特有の食品を見ると、その国

と住む人々の大半を理解できたような気分になる。
 本書は、世界のいろいろな人種の家族と1週間分の食品のポートレート、食事風景を中心としたルポルタージュであり、それぞれの家族の1週間分の食品、各家庭のご自慢のレシピ、食の問題を提起する6つのエッセイを収録した写真集である。豊かな環境で豊富な食材を使い、幸せそうに写る家族、そして片方では、厳しい環境で数少ない食料・食品を囲む固い顔の家族の写真もある。本来楽しかるべき食卓・食品の前での写真も、場所によっては苦しい悲しい絵に思える。心に重く響く写真集でもある。世界人口68億人のうち、約十数億人は飢餓に近い状況にあること、そして一方では有り余る食料の中で肥満に苦しむ十数億の人たちがいることを思い起こさせる。
 しかし、家族がいる食事風景はやはり人の心を安んじさせることは間違いない。食について考え、学ぶ学生に限らず、本書を見てみる価値はありそうだ。



千葉 成夫著
奇蹟の器 デルフトのフェルメール
 五柳叢書、1994年

いつから絵好きになったのか、好きといっても油絵を描くわけではなく、見るのが少し好きなだけだ。オランダ、デルフトの画家フェルメールの作品を初めて観たのは国立西洋美術館の特別展での「手紙を書く女」である。静謐で時が止まり、手紙を書く女性

の遠くを想う心がにじみ出ている画面に惹かれた。
 本書はフェルメールの作品から著者が独断で選んだ数点の作品(私の好きな数点でもある)について、フェルメール自身がどんな想いで何を描こうとしたのか、観る人が作品から何を感じるのか、などを述べたものであり、奇蹟の器であるフェルメールの絵を心底から愛する著者の姿勢が浮かびあがる。
 一般美術書にあるように作者と作品の歴史を紹介してはいるが、それよりも、フェルメールの絵に対する著者(東北大学の卒業生)の深い思い入れに基づいた文学作品的な印象を私は受けており、美術書としては少し変わっているのかもしれない。フェルメールの美術書を何冊か読んだが、フェルメールの作品の紹介などは『謎解き フェルメール』小林頼子・朽木ゆり子(共著)(新潮社、2003年)がお勧めだろう。
 絵は本を読むよりも、直接観て、感じることにあたる。フェルメールの30数点の作品のうち、これまで約半分は観ることができた。



東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」(編)
人間と環境のコミュニケーション農学
 一杜の都からの発信— 農林統計協会、1997年

これは手前味噌の本の紹介になる。この手の話を嫌う人は多いと思うが、その人たちには下記の拙文はスキップしていただかざるを得ない。
 これまで(特に1990年代までに)農学は少し分かりにくい、農学の方向性が紹介されていない、農学

が過小評価されているなど、農と農学に関する多くの意見・懸念が出されてきた。本書は食料問題、環境問題、資源問題などの深刻化が予測される21世紀に向けて、農学の果たすべき役割とその将来ビジョンを発信したものである。私を含めた農学部5人の若手教授(1995年当時)が3年余りの議論を経て、農の歴史を踏まえて今世紀における農学の役割を「コミュニケーション」というキーワードから展望したものである。本書の中にあるように、私たちの生活そして科学の中で「生命の神秘」「生命のゆらぎ」「生命生理の多様性と可塑性」をコンセプトにする「農学的思考」を身につけることは、多様な視点形成が重要視され、環境の時代ともいわれる今世紀の私たちに、なお一層望まれているように感じられる。
 長大な農の歴史に思いを馳せるとともに、農が20世紀までに造り上げてきた功罪を見据えながら、農と農学と人間の行きかたに触れてみるのも楽しいのではないかと。

教育・研究の舞台裏

—私を支え・慰め・励ましてくれた本—



海野 道郎 Umino Michio

総長特命教授(2008年度～2010年度、2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院文学研究科)、工学修士
専門分野:数理計量社会学、環境社会学

[担当科目]

基礎ゼミ:「人と社会—未知の世界を拓く—」/「事実を探る—情報と現実の間—」
基幹科目:「社会の構造:社会の成り立ち—ミクロレベルのメカニズム—」/「社会の構造:社会の成り立ち—マクロレベルのメカニズム—」
総合科目:「社会的ジレンマ:環境問題の基本メカニズム」/「社会的決定を報道に見る」

「チリリンチリリンじてんしゃが、おやまのみちをとおって」と始まる本があった。ロクちゃんという子供が、いろいろな動物たちに巡り合う。白い髭を生やしたヤギのおじさんに会ったロクちゃんが問いかけ、おじさんが答える、「おじさん、おひげはなぜしろい。/ちいさいときにしろいこめ、たくさんたべたでしろいさ。/ロクちゃんこっくりうなずいた」。——「白い米」が憧れの時代だったのだ。この、小さい頃に読み聞かせられた絵本が、私の記憶に残っている最初の本だ。

少年時代に出会った本の中でも、湯川秀樹監修『理科図鑑』は忘れがたい。湯川秀樹のノーベル物理学賞受賞(1949年)が契機となったと思われるこの本を、私は頁がばらばらになるまで読み込んだ。『理科教室:ケンちゃんの不思議』(著者失念)は、科学する心を育ててくれた。オパーリン『生命の起源』は、生物から化学に私の関心をシフトさせた。こう

した読書経験は、小学校以来の小動物飼育や中学・高校時代の化学実験の経験と相まって、大学受験に際して迷うことなく理科系を選ばせた。

しかし、私は今、文学研究科出身の総長特命教授として、君に語りかけている。その間の事情を記す余裕はないが(とりあえずは、中村捷編2005『人文科学ハンドブック』東北大学出版会、193頁を参照)、私は大学院の途中で社会科学に転じ、環境や不公平などに関する社会意識の分析や、個人の意思決定と社会的決定との関係についての理論分析に携わってきた。授業では、そのような問題を通して、受講者の皆さんが感性豊かな論理的思考力を身につけるのを援助したいと思っている。

以下に選んだ6冊は、必ずしも私の専門分野(社会意識の数理・計量社会学)の本ではない。社会科学者としての私の進路を決定付けた専門書は、個人的には重要な本だが、ここで紹介しても、ほとんど意味がない。授業の中で紹介する本は、シラバスを見ればよい。また、専門分野を離れた本であっても、高村薫『太陽を曳く馬』(新潮社、2009年)のような新刊書や立花隆+立花ゼミ『二十歳のころ』(新潮文庫、2002年)のような学生の目に付きやすい本、『方丈記』のような誰でも知っている本(私は、海外出張のときに携えていくことが多い)は除いた。こうして選ばれた本は、君の専門分野が何であろうと読むことができ、しかも、君の精神を鍛えしなやかにしてくれるだろう。じっさい、過半の本は、私が理科系の学生・院生だった頃に読み、その後も折に触れて頁を繰り、今なお、敬意と愛着を抱いている本である。大学入学以後の私を支え・慰め・励ましてくれた本でもある。(2010年2月)



プラトンの

国家(上・下)

藤沢 令夫訳、岩波文庫、1979年、原著、BC4世紀

ギリシャ時代の哲学書など難しそうだし、国家のことなど自分には関係ない、と君は思うかもしれない。しかし、君が実際にこの本を読み始めるなら、それが二つとも誤りであることに気づくはずだ。

第一に『国家』は読みやすく面白い。プラトンの師



桑原 万寿太郎著

動物の体内時計

岩波新書、1966年

ミツバチは時間感覚を持っているのだろうか。ある日、研究者の食卓にあるママレードに、一匹のミツバチが訪れた。やがて、多くのハチが食卓を訪れるようになった。彼が毎日同じ時間に朝食を食べていると、ハチたちはその時間帯には来るが、他の時間帯

ソクラテスを中心とした対話が続く中で、しばしばどんでん返しが起こる。「なるほど、そうだ」と思っていると、実はその考えに問題があることが述べられる。そのようにして、探求が深まりを見せる。その「劇」を見ながら、あるいはそれに参加しながら、読者の思索は深められ、知的しなやかさが養われる。

第二に、この本は君のための本でもある。なぜなら、副題「正義について」が示唆するように、この本は、正義の意味を探求し、幸福との関係を論じているからだ。そしてそれは、これまでの自分から脱皮して新しい精神をもった自己を構築し直す時機にある君が、正に考えるべき問題だからだ。しかも、それなくしては、友人関係も部活動も長続きしない。社会の基本問題でもある。この本は、社会の中に生きる自我を確立しようとする君にとって、不可欠な本になるだろう。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』(岩波文庫)は、この問題を、さらに体系的に論じている。

にはほとんど訪れない。試みに5日目にはママレードを出さなかったが、朝食時刻になると大勢のハチが来た。

しかし、これだけでは、ミツバチが時間感覚を持っている証拠にはならない。同じ現象が、他の理由によって生じる可能性もあるからだ。こうして研究は始まり、ミツバチのコミュニケーションとそれを支える体内時計の機構が明らかにされていく。

この本は、かなり古い本であり、書かれている個々の事実については、その後の修正があるかもしれない。しかし、新たな観察や実験とともに科学的発見が次々になされていく過程と、それを生み出す科学的探究の精神は鮮やかだ。学生諸君には是非、その醍醐味を味わい身につけて欲しい、と私は思う。

科学的探究について記し同じような感動をもたらしてくれた本には、同じ著者による『動物と太陽コンパス』、東北大学教授だった栗原康による『有限の生態学』など、多くの良書がある。



木下 順二著
風浪
岩波文庫、1982年、原著、1962年

現代の日本社会は明治初期や第二次世界大戦後と並ぶ激動期にある、と言われる。その中で青年期を迎えた君にとって、明治初期の熊本を舞台としたこの戯曲は、共感とともに読むことができるだろう。社会の変動期には、次の社会を形成するさまざ

まな思想が提唱される。明治初期の熊本では、横井小楠を師と仰ぐ実学党、朱子学に依る学校党、神道系の敬神党などが並立し、それぞれの思想によって新しい社会を創造しようとしていた。さらに、キリスト教も入ってきた。このような社会状況の中で、志を持つ青年たちは、それぞれの道を追求める。

しかし、主人公・佐山健次は、どの思想にも共感する面を見出しながら、どの一つにも入り込めない。神風連事件前後の激動期に生きる佐山の葛藤を中心テーマとして、この戯曲は展開する。

大学生となり、これまでの自分から人間的・思想的に脱皮する時機を迎えた君にとって、佐山の葛藤は他人事ではない。

木下順二は、『夕鶴』などの民話劇作家である以上に現代劇作家である。『風浪』を読んだ後には、第二次世界大戦中のスパイ事件を題材にした『オットーと呼ばれる日本人』や戦後の極東軍事裁判をめぐる『神と人との間』など、多くの作品に進んで欲しい。



井上 ひさし著
吉里吉里人
新潮文庫、1985年、原著、1981年

読み方によっては、荒唐無稽な娯楽小説である。売れない小説家・古橋健二が、取材のために東北本線で一関付近を北上中に、吉里吉里国の独立運動に巻き込まれ、ひょんなことから大統領にまでなってしまう。この間に生じる種々の出来事が、『ひょつ

こりひょうたん島』の作者によって描かれている。寝転がって笑いながら読むことができる。

しかし、この小説は、それ以上に思想小説である。吉里吉里村は、面積40平方キロ弱、人口4千人余の小さな村に過ぎない。しかし、食料は自給可能であり、先進的医療技術を誇る病院を運営し、行政は極端に簡素化され、金本位制度の導入によって国際企業からも支持を得ており、日本国からの独立が法的にも経済的にも可能である。そこで、この小さな村は、自分たちの理想の実現を目指し、日本国から独立しようとする。周到な準備を経て始まったその運動は、しかしながら、独立を阻もうとする日本国の力によって潰されていく。その過程を見る中で、我々が日ごろ当たり前だと思っている物事が、次々に俎上に載せられていく。

この小説は、固定観念に縛られがちな我々の思考を解放し、自由な精神に導いてくれる。高橋和己『邪宗門』とは対照的なユートピア小説である。



森 有正著
パビロンの流れのほとりにて
『森有正エッセー集成I』ちくま学芸文庫、1999年、原著、1957年

東京大学文学部助教授だった森有正は、1950年、船でフランスに旅立つ。40歳を前にしての渡仏だった。そして、その3年後、一連の思索を、次のような文で始めた。「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、

残るところなく、露れているのではないだろうか。」当初は数年のつもりだった森有正のフランス滞在は、結局、彼の死まで続き、この書簡体の文章もまた、彼の生涯に渡って綴られることになって、彼の思想を今に伝えてくれる。ここには、初代文部大臣・森有礼の孫であり、キリスト教の牧師の子として生まれ、フランスの修道会が設立した小中学校で学び、デカルトやバスカルの研究者として研鑽を積んだ森有正が、フランス文化(あるいは、西欧の精神)と格闘せざるを得なかった過程が書き留められている。そこに描かれるのは、凡百の旅行記や紹介文が描くフランスとはまったく異質の、深く硬質な世界である。

この本に私が出会ったのは、1968年、日ごとに変わる喧騒の中で、しかもなお静かに深く考えることを教えてくれた本であった。

森有正は晩年、『生きることと考えること』(講談社現代新書)などの親しみやすい本も残している。



加藤 周一著
読書術
岩波現代文庫、1993年、初版、1962年

どうい本を読んだらよいかについては論じようがないが、どう読んだらよいかは一般論として論じられる。著者はそう考え、自らの読書術を公開する。

その技術は多面的である。急がば回れ、古典を味わう精読術。新刊を数でこなす速読術。臨機応変、読

まずにすまず読書術。原著に挑み、原語に触れる解読術。新聞・雑誌の看破術。難解な本をとりこむ読破術。それぞれが、豊富な例示とともに語られる。

中でも私が気に入ったのは、最終章「難しい本の読破術」である。この章は、いきなり、「わからない本は読まないこと」という助言で始まる。第一に、難しい本の大部分は、文章が下手か、著者が自分の言うことを十分に理解していないかである。第二に、立派な本の中にもある難しい本の場合には、分からない理由が読者の側にある。その種の本の理解には、単語の意味の正確な理解だけでなく、著者の経験とほとんど同種の経験を持っていなければならない、という。この主張には一瞬たじろぐが、「私にとってむずかしい本は私にとって必要でなく、私にとって必要な本は私にとってかならずやさい」という言葉に力づけられる。

医学から出発して東西の文化を論じた当代随一の知性・加藤周一の言葉だけに、傾聴の価値があらう。

本誌の書籍紹介一覧

書籍名	著者 翻訳	発行年(原書)
風土—人間学的考察—	和辻哲郎著	1935年・1991年 1979年
農業の基本価値	大内力著	1990年
世界を不幸にしたグローバリズムの正体	ジョセフ・E・スティグリッツ著 鈴木主悦翻訳	2002年
飢えの構造 増補改訂版	西川潤著	1984年(絶版)
貧困のない世界を創る	ムハマド・ユヌス著 猪熊弘子翻訳	2008年
新・環境倫理論のすすめ	加藤尚武著	2005年
人類の足跡10万年全史	スティーヴン・オッペンハイマー 著 仲村明子訳	2007年(2004年)
ガン回廊の朝(あした)(上・下)	柳田邦男著	1981年(1979年)
数学をつくった人びとⅠ、Ⅱ、Ⅲ	E.T.ペル著 田中勇、銀林造訳	2003年(1937年)
素数の音楽	マーカス・デュ・ソーティ著 富永星訳	2005年(2003年)
線形代数(共立講座21世紀の数学2)	佐武一郎著	1997年
初等整数論講義	高木貞治著	1971年
物理学はいかに創られたか(上・下)	アインシュタイン/インフェルト著 石原純訳	1963年 (上1939年・下1940年)
科学と仮説	ポアンカレ著 河野伊三郎訳	(1938年)
懐手して宇宙見物	寺田寅彦著、池内了編	2006年
科学の方法	中谷宇吉郎著	1958年
二重らせん	ジェームズ・D・ワトソン著 江上不二夫/中村桂子訳	1986年(1968年)
おはなし電気学	佐野昌一著	1939年(絶版)
職業としての政治	マックス・ウェーバー著 脇圭平訳	1980年(1919年)
社会科学における人間	大塚久雄著	1977年
プロテスタンティズムの倫理と 資本主義の「精神」	マックス・ウェーバー著 大塚久雄訳	1989年(1920年)
近代の政治思想—その現実的・理論的諸前提	福田歓一著	1970年
忠誠と反逆—転形期日本の精神史的位相	丸山真男著	1995年
書書周游(萩原延壽集5)	萩原延壽著	2008年
理科系の作文技術	木下是雄著	1981年
ゾウの時間ネズミの時間—サイズの生物学	本川達雄著	1992年
森と文明の物語—環境考古学は語る	安田喜憲著	1995年
奇蹟の器—デルフトのフェルメール	千葉成夫	1994年
地球の食卓—世界24か国の家庭のごはん	ピーター・メンツェル/フェイス・ダ ル—ジオ著 みつちまちこ訳	2006年
人間と環境のコミュニケーション—農学 —社の都からの発信	東北大学農学部 農学ビジョン懇談会	1997年
国家(上・下)	プラトン著 藤沢令夫訳	1979年(BC4世紀)
動物の体内時計	桑原万寿太郎著	1966年(絶版)
風浪(木下順二戯曲選1)	木下順二著	1982年(1962年)
吉里吉里人(上・中・下)	井上ひさし著	1985年(1981年)
バビロンの流れのほとりにて (森有正エッセイ集成1)	森有正著	1999年(1957年)
読書術	加藤周一著	1993年(1962年)

出版社	シリーズ	判型	頁	定価
岩波書店	岩波文庫	文庫	299p	900円+税
創森社		四六判	216p	1600円+税
徳間書店		四六判	390p	1800円+税
ダイヤモンド社			285p	—
早川書房		四六判	382p	2100円+税
丸善	丸善ライブラリー	新書	215p	780円+税
草思社		四六判	413p	2400円+税
講談社	講談社文庫	文庫	上329p / 下321p	品切れ 重版未定
早川書房	ハヤカワ文庫	文庫	I:421p / II:421p / III:392p	各820円+税
新潮社		四六判 変形	478p	2400円+税
共立出版		A 5	221p	2500円+税
共立出版		A 5	416p	6200円+税
岩波書店	岩波新書	新書	上177p / 下194p	700円+税 740円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	288p	品切れ 重版未定
みすず書房	大人の本棚	四六判	282p	2600円+税
岩波書店	岩波新書	新書判	212p	740円+税
講談社	講談社文庫 タイムライフインターナシ ョナル/タイムライフブックス	文庫	243p	467円+税
明治書院	科学知識普及會	四六判	486p	—
岩波書店	岩波文庫	文庫	121p	460円+税
岩波書店	岩波新書	文庫	226p	740円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	412p	1400円+税
岩波書店	岩波新書	新書	201p	700円+税
筑摩書房	ちくま学術文庫	文庫	499p	1400円+税
朝日新聞社		四六判	307p	2600円+税
中央公論社	中公新書	新書	244p	700円+税
中央公論社	中公新書	新書	230p	680円+税
筑摩書房	ちくま新書	新書	206p	品切れ 重版未定
五柳書院	五柳叢書	四六判	239p	2427円+税
ToTo出版		24×32cm	286p	2800円+税
農林統計協会		A B判	115p	2400円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	上456p / 下492p	940円+税 / 1000円+税
岩波書店	岩波新書	新書	201p	—
岩波書店	岩波文庫	文庫	339p	700円+税
新潮社	新潮文庫	文庫	上501p / 中502P / 下520p	上666円+税 / 中667円+税 / 下705円+税
筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	570p	1500円+税
岩波書店	岩波現代文庫	文庫	218p	900円+税